■随想

地域と子育てと美術の可能性
飯田の感性が育むものから

前沢知子（高43回）

私は自然豊かな飯田で生まれ育ち、飯田高校を卒業後、美術大学進学のために故郷を離れました。そして美術家となり、フランスやドイツ、台湾など国内外で滞在制作や展覧会を行うにつれ、「飯田で育んだ感性が、世界に通じる作品の魂になっている」という大切なことを実感するようになりました。

私の感性を育んだ故郷飯田のエッセンスを思い出してみます。山脈に囲まれた澄んだ空。額装された空の絵です。この時期（6月）木々は益々眩しくなり、風越山の緑が濃く感じられ、爽やかな空気が肌を包みます。色彩や皮膚感覚が季節を告げます。これが私たち伊那谷の人々の感性を豊かにする源です。

地域と美術の可能性

私が美術家として活動するうち「美術と地域の関わりの可能性」に気づいたきっかけがあります。それはフランスでの滞在制作と展覧会です。モンフランカンというフランス中西部、ロット・エ・ガロンヌ県にある中世の面影を残す小さな城塞都市、ひまわり畑に囲まれた小島のような、飯田の丘の上とよく似た美しい街。そんなのどかな田舎街に滞在し、作品制作と展覧会を行いました。

これはダイムラー・クライスラーグループの企業による芸術文化支援（メセナ活動）と、ロット・エ・ガロンヌ県文化事業局との共同の、美術家の育成及び日本との国際交流を目的とした事業です。そしてモンフランカンの地域活性化事業、いわゆる「町おこし」でもあります。「中世の城塞都市」という観光地であるこの町は、その小ささゆえ観光客が留まらない。そんな町の良さを広め資産を活かすためのものです。作家には空き家を利用した住居とアトリエが提供されます。そこは美術の発信の

●まえざわ・ともこ
美術家。1972年竜丘生まれ。東京造形大学卒。同大学講師。美術から子育てを学ぶ会主宰。上野の森美術館、東京都写真美術館、国立国際美術館、台湾、仏などで展覧会やワークショップ、滞在制作を多数行う。

場、そしてこの地域を世界に紹介する場です。

この時制作したのが「私の作品を見つけてください」というタイトルの作品です。この作品は展覧会を観にきた人が、壁に掲示された「私の作品を見つけてください」という文章を読んで、カメラを手にモンフランカンの町を散策し、自分が「私の作品だ」と思うものを自由に写真に撮り、その写真を展覧会場に飾ります。

この「行為すべて」が作品で、鑑賞者参加型の作品です。「私の作品はどこだろう?」と作品を探しながら、町中を散策し楽しむと同時に、町らしさ、そして自分の視点を見つけます。さらに会場に展示された写真により、他者の視点も見つけます。

モンフランカンとよく似た飯田で、「私の作品を見つけてください」を行えば、どんな作品（つまり飯田への視点）が写真として表れるでしょうか? 新しい飯田の発見でもヒントでもあり、飯田を通して自分や周囲への暖かい眼差しが持てると思います。きっと今まで見えなかった飯田が見えてくるでしょう。

鑑賞者が「私の作品を見つけてください」という作品の指示書を読み、写真を撮影している様子

鑑賞者が「私の作品を見つけてください」として撮影した写真

フランス　モンフランカンの風景

子育てと美術の可能性

私が最近力を入れて取り組んでいることが、もう一つあります。それは乳幼児から始まる人間の描画行為の研究、つまり美術教育です。

故郷飯田にある飯田市美術博物館で、親子を対象としたワークショップ「からだをいっぱいつかって お絵かきしよう！」を行っています。これは２００７年から毎年行っているワークショップで、２０１２年の今年で６回目となります。「お絵かきは、手の動きという身体の発達から始まり、身体の動きが表現活動の始まりである」を基本として毎回テーマを設定して行っています。ワークショップの内容は、床に敷き詰められた10メートル四方の巨大な白い紙の上で、親子が素手素足になり、全身で絵具体験をします。

「からだをいっぱいつかって お絵かきしよう！」というワークショップタイトルですが、「お絵かき」を「からだ」で描く？　お絵かきのイメージは、画用紙に描く姿ですよね。それは座って手だけで描く姿です。しかし、実は「描く」ことは「動く」ことなのです。子どもの心身の動きが表現活動へと導きます。心身の動きは、表現の痕跡。心身の動きは、表現活動の原点です。

子どものお絵かき、つまり人間の描画行為は、「手の動き」という身体の発達から始まります。子どもの絵には身体や心、大脳の「発達段階」が描かれています。

子どもが1歳前後から描き始める「なぐりがき」。点や線をトントン叩くように描く。そのうちに横や縦の線が表れ、グルグル丸を描くようになります。ひたすら集中して、グルグル描く子どもの姿は感動的です。この「なぐりがき」は、子どもの身体の発達の証です。トントントンは手首の、グルグルグルは肘の発達です。

そして子どもは、はいはいからたっちができるようになると、重力の存在を身体で感じます。さらに、歩き走るようになると、空間の存在を感じます。これらの「動き」を伴う成長によって、発達した感覚の「発達段階」が、お絵かきに描かれます。

そもそも身体を動かすこと自体が、人間の根源的な生命の衝動です。その衝動を自由に解き放つと、子どもの生命力は生き生きとしてきます。身体を動かすことと生命感覚は深くつながっています。身体を自由に動かすことで、生命感覚が目覚めます。生命感覚は芸術表現の核となります。

芸術は「心」を「からだ」で表現することができます。「心」を「からだ」で表現すると、「からだ」そのものの生命力が増します。その「からだ」の生命力を、また「心」

が感じて、さらに「からだ」でその「心」を表現できます。

このように、「心」が動けば「からだ」は自然と動き、「からだ」が動けば「心」も動きます。心とからだはつながっているのです。「心」が動く、それはまさに「感動」することです。「感動」はやる気を生み、あらゆる物事の原動力となります。この強い原動力が、子どもの未来を切り開き、豊かにします。

「からだでお絵かき」には、子どもにとって、こんな可能性が秘められています。

飯田市美術博物館でのワークショップ「からだをいっぱい使ってお絵かきしよう！」の様子

美術の一番素晴らしいところは「真理や本質がそこにある」ことだと思います。「価値観や認識を問う」ことで、その「真理や本質」が見えてきます。私が作品で表現していることは「既存の価値観や認識を問う」ことです。これにより今まで見えなかったこと、価値、真理、本質が見えてきます。「目から鱗が落ちる」その瞬間を、作品の中で提示しています。

美術を通して、今まで見えなかった自分／他者そして地域／子育てが見えてくる—美術には未来への「可能性の扉」を開くきっかけが秘められています。

ワークショップで、足で絵具の感触を楽しむ子どもの様子